深川が生んだ偉大な芸術

小津映画×斎藤高順

メモリアルコンサート

2023年
11月12日(日)
14:00 開演 (13:30 開場)
会場：ティアラこうとう

「サイレントからトーキーへ」

小津さんは無声映画を見て育ち、無声映画で監督デビューした。しかし無声映画といっても、映画館での上映は無音ではなかった。楽士が演奏し、活動弁士が説明をつけセリフを喋った。そして、その楽士も弁士も監督の演出を受けてはいない。監督がサイレント映画を完成させても、その後どのように上映されるかは興行主次第だったのだ。やがてトーキーの出現によって、監督は字幕でもなければ弁士の声でもない「役者の肉声」を演出し、どんな音楽をどのタイミングで入れるかも演出するようになった。つまり小津さんはトーキーの初めの一歩を踏みだした監督の一人なのだ。その歩みの先に、今の映画がある。そんなことを考えながら、小津映画の音楽に浸ってみたい。

周防正行（映画監督）

ごあいさつ

本日は、「深川が生んだ偉大な芸術　小津映画×斎藤高順メモリアルコンサート」にご来場いただき、誠にありがとうございます。

小津映画音楽のオーケストラによるコンサートの企画は、何年も前から構想はありましたが、小津安二郎監督の生誕 120 年に当たる今年、ついに実現する運びとなりました。しかも、小津監督と斎藤高順が共に生まれ育った深川の地、ティアラこうとうでコンサートが開催できることは、とても嬉しく、感謝の気持ちでいっぱいです。コンサートの実現に向けて、ご支援、ご協力くださった多くの方々に支えられ、ようやくこの日を迎えられましたこと、深く御礼申し上げます。

父高順が最後に病床の小津監督を訪ねたとき、監督は次のように言われたそうです。「僕の映画のために書いた楽譜は、大事にとっておきなさいよ。きっと役に立つことがあるからね。」

あれから 60 年の時を経て、小津監督の言葉はついに現実となりました。監督が愛してやまなかった音楽の数々を、ご来場の皆さまとともに共有できることは、この上ない喜びに他なりません。

なお、ご多忙なスケジュールにもかかわらず、当企画にご賛同され、出演を快諾してくださったゲストの皆さま、関係者の方々には厚く御礼申し上げるとともに、ご来場のお客さまには、素晴らしい演奏と歌の共演をお楽しみいただければ幸いです。どうぞ、最後までごゆっくりご鑑賞ください。

「小津映画×斎藤高順メモリアルコンサート実行委員会」共同代表　斎藤民夫（斎藤高順次男）

《第１部》

①『一人息子』より「オールド・ブラック・ジョー」……作曲：スティーブン・フォスター
②『秋日和』より「主題曲」「ポルカ」……作曲：斎藤高順
③《小津が愛した世界の音楽》
花売り娘……作曲：ホセ・パディーヤ・サンチェス

《メドレー》
埴生の宿……訳詞：里見義　作曲：ヘンリー・ローリー・ビショップ
巴里の屋根の下……訳詞：西條八十　作曲：ラウール・モレッティ
夕の鐘（主は冷たい土の中に）……作詞：吉丸一昌　作曲：スティーブン・フォスター
アニー・ローリー……訳詞：堀内敬三　作曲：ジョン・ダグラス・スコット夫人
すみれの花咲く頃……作詞：白井鐵造　作曲：フランツ・デーレ
④ チャルダッシュ……作曲：ヴィットーリオ・モンティ
⑤ ア・リトル・ガール・グリーン……作曲：川井郁子
⑥『東京物語』より「主題曲」「夜想曲」……作曲：斎藤高順

《第２部》

⑦ 夜の鐘……作曲：ルイージ・パパレッロ
⑧『早春』より「主題曲」……作曲：斎藤高順
⑨『早春』『東京暮色』『彼岸花』より「サセレシア」……作曲：斎藤高順
⑩『彼岸花』より「主題曲」……作曲：斎藤高順
⑪《小津が生きた時代の昭和歌謡》
東京ブギウギ～銀座カンカン娘……作曲：服部良一

《メドレー》
リンゴの唄……作詞：サトウハチロー　作曲：万城目正
旅の夜風（愛染かつら）……作詞：西條八十　作曲：万城目正
青い山脈……作詞：西條八十　作曲：服部良一
君の名は……作詞：菊田一夫　作曲：古関裕而
東京キッド……作詞：藤浦洸　作曲：万城目正
⑫『浮草』より「主題曲」「ポルカ」……作曲：斎藤高順
⑬『秋刀魚の味』より「主題曲」「ポルカ」「終曲」……作曲：斎藤高順

アレンジ：①②③④⑤⑨⑩⑪⑫　横山和也
⑥⑧　斎藤　順
⑬　増井　咲

小津安二郎と深川・小津の深川

１９０３年に深川区亀住町に生まれた小津安二郎は１０歳で三重県松阪に移るまでの１０年。１９２３年２０歳で再び深川区和倉町に戻り３３歳で芝区高輪へ移るまでの１３年・計２３年を深川で過ごしました。生家は肥料問屋を営み、その名残は富岡八幡宮の永昌稲荷に見ることが出来ます。安二郎が通ったのが明治尋常小学校。この学校の前身は小津家の菩提寺でもある陽岳寺です。

小学校の同級生には、三井家の番頭だった三野村利左衛門の玄孫・三野村清一郎や鹿島建設の社長・鹿島卯女などがいました。１０歳になると小津家の郷里の松阪へ転居します。その理由には浅野総一郎創業の浅野セメントの煙害があったと言われています。

１９２３年再び深川の地に戻った小津は、念願の松竹蒲田撮影所に撮影部助手として入社、５年後には監督に昇進し、１９３２年の『生れてはみたけれど』で名声を高めます。この映画では永代橋が映ります。

「僕は深川で育ったんだか、その頃家に出入りしていた者に、のんびりした奴がいてね。それが大体喜八のモデルになっているんだ」と小津が語る喜八物と言われる『出来ごころ』（１９３３年）『東京の宿』（１９３５年）などの作品には、砂町・猿江・古石場など江東区の地名が登場します。

小津が深川に戻った１９２３年は、関東大震災の年でした。和倉町の家は焼失し亀住町に転居します。この家には、芝で育ったカメラマンの厚田雄春や下谷で育った脚本家の池田忠雄などがしばしば訪れています。共に下町育ちということで気があったスタッフでした。１９３４年には、同じ深川生まれの映画監督・井上金太郎が訪ねてきます。この年に制作されたのが小津原案、井上監督の『瓦版カチカチ山』辰巳芸者が主人公の時代劇です。

こうした来訪者と門前仲町の「うなぎの宮川」や「清水のきんつば」に行っていたことが日記に書かれていてグルメぶりがうかがえます。戦後の『お早よう』（１９５９年）には「船橋屋」と思われる亀戸の葛餅のセリフも出てきます。

永代橋を渡るシーンが印象的な『一人息子』を作った１９３６年に小津は高輪へ転居します。戦後は、『風の中の牝雞』（１９４８年）の相生橋や『秋日和』（１９６０年）の清洲橋など、水の街・深川の橋が登場します。

江東区出身で東陽小学校に通った斎藤高順氏と出会った『東京物語』（１９５３年）に深川は登場しませんが、ロケハンの段階では東陽町・砂町などを訪れています。

戦後は深川の地に来ることが少なくなっていた小津ですが、陽岳寺はしばしば訪れていて、法事の後の会食で高橋のどぜう「伊せ喜」で休んだことも日記に残っています。

「伊せ喜」から、ほど近い地に住んだのが小津と並んで深川が世界に誇れる文化人の松尾芭蕉です。それぞれ俳句、映画にひとすじに取り組み、その道を極めた二人ですが、芭蕉は俳句のことを「夏炉冬扇」と無用な物にたとえ、小津は映画作りのことを「トウフ屋」にたとえたりと、照れや自戒を感じさせるところが深川らしい気がします。

それは、小津監督が高順氏に、しゃべりすぎない音楽を望んだこととともつながるようにも思われます。

今回の執筆では、私の尊敬してやまない田中眞澄氏の残されたお仕事を参考にさせていただきました。

野呂達矢
（全国小津安二郎ネットワーク／
江東区古石場文化センター）

音楽家・斎藤高順と映画監督・小津安二郎を結ぶ深川という縁

今から遡ること三十年前の小津安二郎監督の生誕九十周年記念として様々な書籍が刊行され、松竹をはじめ多くの顕彰事業がメモリアルデーである十二月十二日に向けて各種開催されていた。

当時、私は江東区広報広聴課に勤務しており、監督の出生地である深川を取材して、下町に残る小津監督の記憶を探ってみたいという産経新聞の田窪桜子記者の求めに応じて、小津監督の記念館構想を抱いていた上司の芦谷尚夫広報係長と一緒に、区内ゆかりの地である深川不動前のきんつばや小津橋などをご案内した。

また、映画関係者への取材では、十二月三日に深川江戸資料館で記念講演を行い「小津さんは深川生まれということに非常にこだわっていた」と指摘された直木賞作家で『東京物語』（一九五三年）の助監督を務めた高橋治氏に続けて、小津監督の七作品の音楽を担当された音楽家・斎藤高順氏のご自宅までお邪魔させていただいた。

斎藤高順氏には我々を喜んで迎えていただき、まずは、小津監督と初めて仕事をした『東京物語』のお話しからスタートした。

戦後、東京藝大を卒業後、ラジオ劇の音楽などの作曲をしていたものの映画音楽の経験もない二十八歳の若造が、松竹音楽部所属で指揮者でもあった吉澤博さんのおかげで、当時既に神格化されていた小津監督に紹介された時に、監督から「今までどうゆう映画をやってきたのか」と聞かれ、正直に「初めてです」と答えた時の緊張。叱られるかと思いきや「そいつはいいや」と喜んでくれたこと。

『東京物語』の作曲を任されて、撮影された映画にあわせて行われた「御前演奏会」でＯＫが出た時の喜びと安堵。後日、同じ深川の出身だと言うことがわかってから、より一層、親身になって、細かなアドバイスをもらうことができ、また、お酒も教えてもらったと。

斎藤氏のお話しの中で、特に印象深い逸話は「小津監督は明るい音楽が好きで、悲しい場面で悲しい音楽はいらない。むしろ、そういう場面でこそ、明るめの音楽が必要なんだ」と監督から言われ、その後の作品でも、そうした軸をしっかりと押さえて作曲されたそうだ。

大切な宝物である『東京物語』のオリジナル・スコアーも見せていただき、公開当時のポスターに記された「音楽：斎藤高順」のクレジットを感慨深く眺められた斎藤高順氏の写真が載った長文の記事が掲載されたのは、生誕九十周年の平成五年十二月十二日だった。

小津監督の戦前の作品の中では、『男はつらいよ』シリーズの原型とも位置付けられている「喜八もの」という下町長屋を舞台にした作品群には深川テイストが色濃く出ている。一方、晩年までの後期に描かれていた山の手や鎌倉などを舞台にした作品には、その面影は見当たらないようだが、ちょっとしたユーモアや、それこそ斎藤高順氏が意を凝らした軽やかな音楽には、江戸の名残があった明治期の深川のまちで幼少期に過ごした小津監督ならではの「粋な」味が潜んでいると感じている。

小津監督と深川に興味を持たれた方は、永代橋たもとのマンションの三万冊以上の蔵書の中で亡くなられた稀代の天才文筆家・草森紳一氏の『その先は永代橋』（平成二十六年・幻戯書房）をぜひお読みいただきたい。小津映画の専門書ではアプローチできなかった視点で語られる永代橋と小津安二郎。一言で語れない世界が広がる。

小林秀樹
（全国小津安二郎ネットワーク事務局長）

小津監督の作品の多くは、何気ない日常、人の営みが描かれていますが、それについて小津監督は「僕のテーマは《もののあはれ》というきわめて日本的なもので、日本人を描いているから、これでいいと思う」と発言されています。《もののあはれ》といえば、松阪の本居宣長ですが、その三重県松阪市で、9歳～19歳の青春の日々を過ごした小津監督。晩年に、自身の思いを短歌に託して詠んでいらっしゃいます。私は、故郷の本居宣長他、いにしえ人の歌をメロディーにしてお伝えしておりますが、小津監督の31の言の葉に心を合わせると、その視線の源に、拭い難い孤独が感じられて、涙ぐんでしまいます。

岡美保子（グローバル・シンガー／和歌舞台創作者／松阪市ブランド大使）

小津が愛した世界の音楽

「花売り娘」、メドレーで「埴生の宿」「巴里の屋根の下」「夕の鐘（主は冷たい土の中に）」「アニー・ローリー」「すみれの花咲く頃」

小津監督が20代の頃に蒐集したSPレコードが鎌倉文学館に保管されており、それらを元に制作された2枚組のCDがあります。それが「小津安二郎が愛した音楽（SP音源による）」というCDで、「花売り娘」「巴里の屋根の下」「主は冷たい土の中に」はその中からの選曲です。

「埴生の宿」は『麦秋』『彼岸花』、「すみれの花咲く頃」は『お茶漬けの味』、「夕の鐘（主は冷たい土の中に）」は『東京物語』、「アニー・ローリー」は『秋刀魚の味』の劇中に使用されました。

斎藤高順によると、小津監督はご自分の好きな曲を劇中で使いたがる傾向があって、「サ・セ・パリ」（フランス）と「ヴァレンシア」（スペイン）は「サセレシア」、「ビア樽ポルカ」（チェコ）は『浮草』『秋日和』『秋刀魚の味』のポルカを作曲するうえで参考にした曲で、いずれも小津監督から教えていただいた曲ですが、監督は世界各国の流行歌、民謡、映画音楽などをよくご存じだったとのことです。

川井郁子コーナー

ヴィットーリオ・モンティ作曲「チャルダッシュ」。イタリアの作曲家モンティの代表曲。軽快で華やかな曲調ですが難度が高く、超絶技巧の曲としても知られています。

《川井郁子コメント》

オリジナル作品「ア・リトル・ガール・グリーン」は、2010年制作のアルバム「Reborn」に収録されています。当時、娘が4歳で、休日に連れて行った公園で無邪気に遊ぶ様子を見ていると本当に幸せで、その想いを曲にしました。

小津安二郎監督作品の大ファンだった私は、その作品の音楽の多くをいつもお世話になっているベーシスト、斎藤順さんのお父様が手がけられたと知った時は本当にびっくり、大感激しました！作品を包み込む大きく温かい音楽は順さんのお人柄と通じるものを感じます。ちなみに、私の娘も小津安二郎監督作品の大ファン。二人でこの素晴らしい機会を心待ちにしています。

5年ほど前にキングレコードからお話を頂き小津安二郎映画音楽のレコーディングをする機会に恵まれました。これまでに日本を始めオーストリア、ニューヨーク、ロサンゼルス、シカゴ、ホノルル、ジャカルタなどたくさんの場所で斎藤高順によって作曲されたこれらの曲を演奏する機会がありました。海外で私のコンサートを聞きに来る方々は、音楽を通して初めて小津映画に出会うようです。たくさんの方々がこの音楽を聴いてCDや楽譜を買ってくださいます。どこか懐かしい雰囲気に溢れる曲一つずつは思わず口ずさみたくなるようなものばかりです。よく言われるのは、もっと日本の伝統的な和声から作曲されているのかと思ったら西洋音楽に近いということ。でもどこか日本らしくて他にはない音楽だということです。一度聞いたらずっと聞き続けたくなるような音楽です。

青木美樹（ピアニスト／アリゾナ州立大学音楽学部ピアノ室内学科准教授）

『一人息子』より「オールド・ブラック・ジョー」

「人生の悲劇の第一幕は親子となったことにはじまっている。」

芥川龍之介の随筆「侏儒の言葉」から始まる、小津安二郎監督のトーキー第一作目は、母と息子の人生を中心軸に描いた物語『一人息子』でした。主題曲は、小津監督がお気に入りだったアメリカ民謡の父、スティーブン・フォスターの代表作「オールド・ブラック・ジョー」です。劇中曲は、サウンド版の時代から小津映画音楽を手掛けてきた伊藤宜二が作曲を担当しました。演奏は、松竹大船楽団と記録されています。

1936年（昭和11年）9月公開の松竹作品。出演は、飯田蝶子、日守新一、葉山正雄、坪内美子、吉川満子、笠智衆ほか。

『秋日和』より「主題曲・ポルカ」

斎藤高順にとって6作目の小津映画音楽となる『秋日和』の「主題曲」は、弦楽器のユニゾンから始まり、美しい母娘（原節子、司葉子）をイメージさせる清潔感があってさわやかなメロディの中に、別離を予感させるような一抹の侘しさも込められています。「ポルカ」は、後期の小津映画音楽を象徴するもので、原節子演じる母を再婚させようと、岡田茉莉子や佐分利信ら中年三人がユーモラスに奮闘するシーンのバックに流れ、アコーディオンやヴァイオリン、フルート等の軽快な旋律がスクリーンに躍動感を与えました。

1960年（昭和35年）11月公開の松竹作品。

出演は、原節子、司葉子、笠智衆、佐田啓二、佐分利信、中村伸郎、北龍二ほか。

無声映画の時代から小津作品には、どこかに音楽が流れている気になってしまいます。
『東京暮色』の音楽を担当した斎藤高順さんは、小津監督の指示によって「サセレシア」なる曲を書いている。軽快そのものでシャンソンの（サ・セ・パリ）と（ヴァレンシア）のふたつを混ぜて作ったものだ。哀調のシーンを明るい音楽で掬い上げたという。傑作です。
晩年の小津作品に登場する音楽は、作品の登場人物に合わせて音楽そのものが配役されているかのように生き生きと、つまり、俳優のように演技されているように思われます。
小津作品では世界的な評価を得た『東京物語』、遺作の『秋刀魚の味』まで幾多の作品の音楽を紡いで画面を飾った斎藤高順サウンドは、いっそう印象づけてくれました。
清冽な美しさ、哀切をこめた情愛、ほのかな寛容。
思い出す映画と共に、そのシーンの音楽が生き生きと浮かんで来ます。
小津映画は私の貴重な財産です。

飯田一雄（昭和の浅草軽演劇を伝承する劇団にんげん座主宰／脚本家）

『早春』『東京暮色』『彼岸花』より「サセレシア」

「サセレシア」は、『早春』で主人公（池部良）が病気の同僚（増田順司）を見舞うシーンと、同僚の葬式のシーンに付ける音楽として書いたものですが、小津監督が大変気に入ったため、『東京暮色』では全篇のテーマ音楽に、また『彼岸花』でもラーメン屋のシーンに使われました。「サセレシア」という曲名は、小津監督がお好きだった「サ・セ・パリ」と「ヴァレンシア」からの造語で、監督ご自身が命名しました。
1957 年（昭和 32 年）4 月公開の松竹作品。出演は、笠智衆、有馬稲子、原節子、山田五十鈴、信欣三、中村伸郎、杉村春子ほか。

『彼岸花』より「主題曲」

『彼岸花』は小津映画最初のカラー作品ですが、山本富士子が出演するので、小津監督は何か派手な喜劇にしようと考え、音楽も全体的に明るく華やかなものになっています。「主題曲」は、ややドラマチックな前奏のあと、弦楽器を主体にゆったりとした旋律が現われます。適齢期を迎えた娘を持つ父親の、愛情ゆえに束縛したり、感情的になってしまう矛盾した親心を表すテーマに用いられましたが、監督からは心理描写に捉われない、いわゆる“お天気のいい音楽”で、との注文でした。後半に現れる弦楽四重奏の部分は、京都の旅館の娘（山本富士子）と主人公（佐分利信）が結婚について語り合うシーンのバックに用いた音楽で、明るさの中にも一抹の侘しさと品格を感じさせる旋律が印象的です。
1958 年（昭和 33 年）9 月公開の松竹作品。出演は、佐分利信、田中絹代、有馬稲子、佐田啓二、山本富士子、久我美子、中村伸郎、北龍二、笠智衆ほか。

世界に響いた「東京物語」

「小津映画の音楽の特徴といえば特徴がないことだ」と分析したのは、私の朗読シリーズ「小津安二郎の映画を聞く」で音楽を担当するジャズピアニストの松本峰明氏だ。小道具の一つまで「小津好み」で揃えられた小津映画。音楽もしかりである。しかし「東京物語」から遺作までの音楽を担当した斎藤高順氏は、ある意味「小津映画音楽」を確立した作曲家と言ってもいいだろう。記憶に新しい二〇二一年の東京オリンピック閉会式。国旗入場で流れたのは「東京物語」のテーマだった。流れる音楽に、入場する国旗にテレビに釘付けになった。特徴のないことを誇りとする劇伴音楽が、東京のいや日本の代表曲として世界に響いた瞬間だった。
今日は小津映画のワンシーンを思い浮かべながら、「小津映画音楽」をオーケストラでたっぷりとご堪能いただけたらと思う。

中井貴惠（俳優／エッセイスト）

『東京物語』より「主題曲・夜想曲」

斎藤高順が初めて手掛けた小津映画音楽であり、映画同様に音楽も傑作と評される作品です。「主題曲」は、瀬戸内海に臨む尾道の長閑な景観を想起させるホルンとハープによる前奏に続いて、夜明けを表現するような激しい旋律のあと、美しく荘厳なテーマが弦楽器を中心に奏でられます。「夜想曲」は、老母（東山千栄子）が亡き息子の嫁（原節子）を訪ね、しみじみと語り合う中で、お互いの心が通い合って涙ぐむという感動的なシーンのバックに使われました。映画を観るとほとんど聴こえないほど小さな音量ですが、小津監督によると音楽がシーンと合い過ぎていて、他とのバランスが崩れるため、わざと音量を下げたとのことです。
1953 年（昭和 28 年）11 月公開の松竹作品。出演は、笠智衆、東山千栄子、原節子、山村聰、三宅邦子、杉村春子、中村伸郎、大坂志郎、香川京子ほか。

竹内郁子コーナー

重音式無伴奏マンドリンソロ「夜の鐘」。イタリアの作曲家ルイージ・パパレッロによる抒情的な小品で、鐘の音を表わすハーモニクス（倍音奏法）が印象的なマンドリン独奏曲です。「竹内郁子マンドリンの世界」（1991 年）に収録。

『早春』より「主題曲」

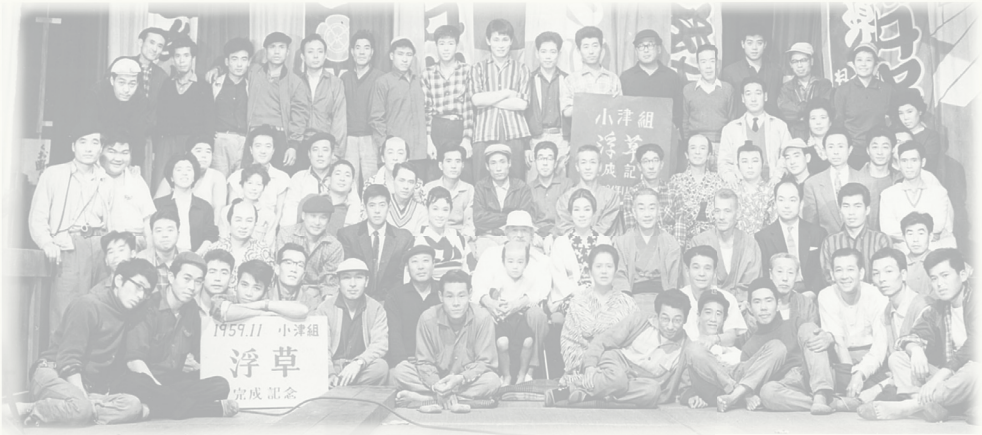
さわやかな早春をイメージさせるマンドリンの独奏で始まる主題曲は、映画のタイトルとエンディングだけに使われました。実は、映画の中ではマンドリンは使用されておらず、小津監督が亡くなった翌年に録音された「小津安二郎名作映画音楽集」で初めて用いられました。小津監督はマンドリン演奏が特技で、そんな監督を偲んで当時より第一人者として活躍していたマンドリン奏者竹内郁子さんにお願いして、美しいマンドリン独奏の主題曲が誕生しました。それから 60 年、現在もマンドリン界を牽引するレジェンド、竹内郁子さんのマンドリン演奏をどうぞご堪能ください。
1956 年（昭和 31 年）1 月公開の松竹作品。出演は、池部良、淡島千景、岸恵子、浦辺粂子、田浦正巳、杉村春子、高橋貞二、笠智衆ほか。

小津映画の音楽は〈無関心の音楽〉として知られる。それはシーンで起こっている物語上の出来事にあたかも関心がないかのように、それとは無関係に流れている音楽のことである。
小津監督は斎藤氏に「何が起ころうと、いつもお天気のいい音楽であってほしい」と述べたという。だが、物語と意味的連関をなさないにもかかわらず、なぜか氏の音楽を耳にすると小津映画の物語がありありと想起される。確かにその音楽は映画をみている現在において〈無関心〉であるが、みた後はもはやその音楽は〈無関心〉とは言えない密な関係を物語と結んでしまっている。斎藤氏の「お天気のいい音楽」は観客の頭の中で小津監督の物語と共に永遠に流れ続ける。

正清健介（日本学術振興会・特別研究員ＰＤ）

『浮草』より「主題曲・ポルカ」

斎藤高順は、ロケ地となった伊勢志摩に古くから伝わる民謡やお囃子などをモチーフにした、民謡風のひなびた「主題曲」を書くつもりでしたが、小津監督からは、場所柄や芝居の設定に捉われない品格のある曲を希望され、どこかひなびた感じを残しつつ、弦楽器の美しい調べが印象的な「主題曲」が誕生しました。「主題曲」はタイトルとエンディングのみに使われましたが、劇中にたびたび登場するのが「ポルカ」です。この「ポルカ」こそが『浮草』のテーマ音楽というべきもので、冒頭の旅役者一行を乗せた連絡船が港へ入るシーンに流れた瞬間、作品の空気感を決定付けてしまうほどの効果を発揮しました。「ポルカ」はアコーディオンとヴァイオリンが主旋律を奏で、要所要所でピッコロとマリンバが前面に出るシンプルな構成ですが、小津監督は大変に喜ばれ、「サセレシア」同様に「ポルカ」も小津映画には欠かすことのできない象徴的な音楽となりました。
1959 年（昭和 34 年）11 月公開の大映作品。出演は、中村鴈治郎、京マチ子、若尾文子、杉村春子、川口浩、笠智衆、野添ひとみ、三井弘次、田中春男ほか。



写真提供／斎藤家

小津映画×斎藤高順メモリアルコンサートの開催、誠におめでとうございます。
聴く人は望郷を感じ、日常の一節は儚く尊いと総合芸術で表現された小津安二郎監督作品に欠かすことのできない心地よい旋律。ファミリーで継承されていることに感謝するほかありません。高順さんは小津監督との打ち合わせで茅ヶ崎を訪問されているようです。当時の人と街を音で表現されていることが、いち映画ファンにとっては堪らない時間です。
今年は小津安二郎監督生誕１２０年の節目であります。昨今の多様性において映画の重要性は、人にとって必要なアナログ要素となっていくと個人的に思っています。

森浩章（茅ヶ崎館五代目当主／茅ヶ崎映画祭実行委員長）

小津が生きた時代の昭和歌謡

「東京ブギウギ」～「銀座カンカン娘」、メドレーで「リンゴの唄」「旅の夜風（愛染かつら）」「青い山脈」「君の名は」「東京キッド」
これらは、『一人息子』（昭和 11 年）から『東京物語』（昭和 28 年）までに公開された小津映画と、ほぼ同時期（戦前から戦後まもなくまで）に公開、大ヒットした昭和歌謡（銀幕歌謡）の名曲ばかりです。
昭和 12 年公開の『淑女は何を忘れたか』の翌年、同じく松竹が制作した『愛染かつら』は、小津映画でもお馴染みの田中絹代と上原謙の主演によって空前の大ヒットとなり、主題歌「旅の夜風」は 80 万枚を超える驚異的なヒットを記録しました。
第二次世界大戦後、日本で最初に公開された松竹映画『そよかぜ』の主題歌「リンゴの唄」は、映画でも主演を務めた並木路子と霧島昇の明るくさわやかな歌声が、敗戦の暗い世相に打ちひしがれた日本中に、明日への希望を届けました。
昭和 24 年、『晩春』と同年に公開された東宝映画『青い山脈』は、原節子と池部良の主演、主題歌は藤山一郎と奈良光枝が担当しました。
昭和 25 年、『宗方姉妹』と同年に公開された松竹映画『東京キッド』は、当時 13 歳だった美空ひばりの主演で、明るく楽しいリズムの主題歌が、戦後の日本人に夢と希望を与え大ヒットしました。
昭和 27 年、『お茶漬の味』と同年に公開された松竹映画『君の名は』は、岸恵子と佐田啓二主演によるメロドラマで、織井茂子が歌う哀愁を帯びた主題歌も大人気でした。
銀幕歌謡ブームは、小津監督が活躍した時代とほぼ被っており、監督が亡くなる頃には下火になりました。松竹銀幕歌謡は、主に万城目正が作曲を担当しましたが、一方で文芸作品の音楽は東京音楽学校（藝大）出身者を積極的に起用するようになり、斎藤高順もそのような方針のもと、松竹大船撮影所音楽部で指揮者を務めていた吉澤博から小津監督へ推薦されました。

斎藤高順先生と作品との出会い

小津映画の音楽を担当された、作曲家斎藤高順先生と私との出会いは、日本吹奏楽指導者協会の総会の時でありました。総会後の帰りの車中、会話の中で先生が深川の出身であることを知り、そのまま深川にある私の馴染みの寿司屋にご一緒していただき、お酒を酌み交わしながら楽しい一時を過ごしたことを懐かしく思い出します。後日改めて先生をお誘いし、先生の出身校であった東揚小学校や区内を案内させていただきました。先生にとっては何十年振りに訪れた深川、当時の下町の人々から受けた温かい人情、涙が溢れるくらいの懐かしさ、そして嬉しさを充分に感じられておいでのご様子でした。

そして当時、私が指導していた元加賀吹奏楽団のために、江東区に因んだ楽曲を依頼し、出来上がった作品が郷愁の町「深川」でした。（この作品は１９７９年３月に元加賀吹奏楽団第７回定期演奏会で演奏）

またその後は、小津映画作品の中から「東京物語」「彼岸花」「秋刀魚の味」を吹奏楽用に編曲していただきました。（これらの作品は１９９５年５月に江東青少年吹奏楽団第12回定期演奏会で演奏）

斎藤先生にはこの他にも多数の作品の編曲、作曲をしていただき大変お世話になりましたこと、心より感謝しております。

来年は先生にとりまして生誕百年という輝かしい年。是非先生の楽曲をこのステージで演奏できたらと、心から願っております。

戸村明徳（明治小学校バンド特任講師／東京都吹奏楽連盟常任理事）

『秋刀魚の味』より「主題曲・ポルカ・終曲」

小津安二郎と斎藤高順にとって最後の仕事となった『秋刀魚の味』ですが、「主題曲」はハープの美しい序奏に続いて、弦楽器による抒情的な旋律が流れます。父と娘（笠智衆、岩下志麻）の淡々とした家族愛や人生のはかなさ、侘しさを暗示させる「主題曲」のあと、小津映画音楽を象徴する「ポルカ」へと続きますが、「サセレシア」風のメロディーにポルカ調の軽快なリズムで奏でられる「ポルカ」は、「小津調ポルカ」の集大成とでもいうべき名曲です。小津監督は「自分が歌詞を書くから、宝塚の寿美花代に歌わせてレコーディングしよう」というほど気に入り、明るい曲調にもかかわらず、どこか人生の無常を感じさせるメロディーが全篇にわたって使われました。「終曲」は、愛娘を嫁に出した夜、一人ぼっちになった老父の侘しさを物語るヴァイオリンの哀調ある音色が、「主題曲」の旋律を穏やかに奏で、全楽器による感動的なフィナーレへと続いて演奏は終わります。

1962 年（昭和 37 年）11 月公開の松竹作品。出演は、笠智衆、岩下志麻、三上真一郎、佐田啓二、岡田茉莉子、中村伸郎、三宅邦子、北龍二、東野英治郎、杉村春子ほか。

プロフィール

斎藤高順（作曲）

1924（大正 13）年 12 月 8 日東京深川生まれ。2004（平成 16）年 4 月 11 日没（79 歳）。家業は深川の花柳界で酒屋を営み、辰巳芸者が出入りする高級料亭などが得意先だった関係から、経済的に恵まれた環境で育った。兄貫一がクラシック音楽のレコード蒐集家であった影響を受け、高順もクラシック音楽に傾倒した。すでに戦争中であったにも関わらず、高価なスタインウェイのグランドピアノを購入してもらい、本格的に音楽の勉強を開始。1942（昭和 17）年 4 月、武蔵野音楽学校予科ピアノ科へ入学するが、どうしても作曲の勉強がしたいため、翌 1943（昭和 18）年 4 月に東京音楽学校本科作曲科へ再入学。作曲を信時潔、橋本國彦、細川碧、池内友二郎、伊福部昭、指揮は金子登に師事。1944（昭和 19）年 10 月、東京音楽学校在学のまま陸軍戸山学校へ軍楽生徒として入校、翌 1945（昭和 20）年 8 月終戦により復員、東京音楽学校へ復学。1947（昭和 22）年 3 月東京音楽学校本科卒業、1949（昭和 24）年 3 月東京音楽学校研究科（作曲）卒業、以後作曲活動に入る。NHK のラジオ放送、民放のラジオドラマの音楽等を手掛ける中、突然小津安二郎監督に抜擢されるという幸運に恵まれ、1953（昭和 28）年の『東京物語』から、1962（昭和 37）年の遺作となった『秋刀魚の味』まで 7 作品の小津映画音楽を担当、また同時期に日活作品の映画音楽も多数手掛けた。その後、テレビドラマの音楽や学研の教育映画の音楽を担当する中、吹奏楽作品の作曲にも取り組むようになり、「ブルー・インパルス」「オンリー・ワン・アース」や、大阪万博でも使われた「輝く前進」など、吹奏楽作品を数多く遺した。それが縁となって、1972（昭和 47）年から 1976（昭和 51）年まで航空自衛隊航空音楽隊長（一等空佐）を務めたのち、1976（昭和 51）年から 1986（昭和 61）年まで警視庁音楽隊長（参事警視庁総務部理事官）を歴任。以降、尚美音楽短大教授、聖徳大学講師、その他日本吹奏楽指導者協会理事、日本国民音楽振興財団理事なども務めた。弟鶴吉は元 NHK 交響楽団チェリスト。

井田勝大（指揮）

鳥取県生まれ。東京学芸大学音楽科卒業、同大学院修了。K バレエカンパニーの多くの公演を指揮するほか、多くの国内外のバレエ公演を指揮。2018 年 4 月以降、NHK『バレエの饗宴』で指揮を務めている。現在、K バレエトウキョウ及びシアターオーケストラトウキョウ音楽監督、グランドフィルハーモニック東京首席客演指揮者。エリザベト音楽大学講師、洗足学園音楽大学非常勤講師。

川井郁子（ヴァイオリン）

香川県出身。東京藝術大学卒業。同大学院修了。現在大阪芸術大学教授。ニューヨークのカーネギーホールや、パリ・オペラ座、ワシントン D.C.で全米さくら祭りへ出演するなど国内外で活躍。作曲家としてもジャンルを超えた音楽作りに才能を発揮。TV や CM 等、映像音楽の作曲も手がける。フィギュアスケートではミシェル・クワン選手、羽生結弦選手など国内外の選手にも楽曲が数多く使用されている。第 36 回日本アカデミー賞で最優秀音楽賞を受賞。また、NHK 大河ドラマ「麒麟がくる」の紀行のテーマを担当。CD デビュー20 周年記念として、2022 年に和洋混合オーケストラ「響」を結成し、各方面より絶賛された。社会的活動として「川井郁子マザーハンド基金」を設立。また全日本社寺観光連盟親善大使、国連 UNHCR 難民サポーターを務める。2023 年 3 月にオーケストラ響のデビューアルバム「響」を発売。

竹内郁子（マンドリン）

1945 年 マンドリンを比留間絹子氏に師事
1950 年 NHK オーディション合格
1971 年 イタリア国際フェスティバルに招かれる
1972 年 東京マンドリンアンサンブル結成
1987 年 日本レコード大賞プレイヤー賞を受賞
1989 年 日中交流使節団に参加
1991 年 台北交響楽団に招かれる
1994 年 香港オーケストラの客演
1996 年 芸術劇場の牧野由多可個展に出演
1997 年 NHK ラジオ談話室に 5 日間生出演
1998 年 にっぽん丸世界一周のメインステージ出演
1999 年 日本マンドリン連盟より功労賞受賞
2000 年 日中文化観光交流 2000 年記念式典にて演奏
2002 年より イタリア、ドイツ、フランス、オーストリア、スイス等 NHK 日本文化祭に毎年参加。

NHK ラジオ「きらめき歌謡ライブ」レギュラー出演。現在、NHK 文化センター、よみうり日本テレビ文化センター講師

フォレスタ（コーラスグループ）より
横山慎吾、塩入功司、吉田和夏、小笠原優子
全員が音楽大学および大学院にて研鑽を積んだ優れた音楽家たち。フォレスタとしてテレビ・ラジオを始め、各メディアへ出演しながら、全国各地でのコンサート活動を展開。「ＢＳ日本・こころの歌」（ＢＳ日テレ・毎週月曜日夜８時放送）に出演中。フォレスタのテーマは「歌い継ぎ、語り継ぐ、たおやかな日本のこころ」。時代とともに生まれた名歌名曲。特に、日本の風土に育まれた美しい詩と旋律を中心に歌い継ぐことを大きなテーマとする。歌はいつも人々の想い出に寄り添い、人生の励ましや安らぎとなる。フォレスタは多くの名曲のジャンルを問わず、素晴らしいハーモニーを多くの心に届けようと志を持つ。フォレスタ独自のアンサンブルで豊かな音楽世界の広がりを目指す。

斎藤章一／長男（チェロ）
東京藝術大学卒業、同大学院修了。1985 年、小沢征爾指揮の新日本フィルハーモニーのヨーロッパツアーに参加。聖徳学園講師、北鎌倉女子学園講師を歴任。2011 年 3 月まで東京ニューシティ管弦楽団首席チェリスト、船橋ジュニアオーケストラトレーナー。東京室内管弦楽団、横浜ノネットメンバーとして活躍。東京シティ・フィル、大阪センチュリー交響楽団、広島交響楽団、山形交響楽団等、多くのプロオーケストラで客演首席チェリストを務める。「ネスカフェ・ゴールドブレンド」のテレビコマーシャルに出演。

斎藤民夫／次男（企画・運営）
明治学院大学卒業。IT 関連企業でコンピュータ系ドキュメントの制作に従事。2015 年に長男、長女らとサイトウ・メモリアルアンサンブルを結成、小津映画音楽イベントを定期的に企画・開催。数年前から温めてきた小津映画音楽のオーケストラコンサートの企画を、小津安二郎生誕 120 年に当たる今年（2023 年）具現化、小津映画×斎藤高順メモリアルコンサート実行委員会の中心メンバーとして、コンサート開催へ向けて運営面のサポートを行う。

斎藤順／三男（コントラバス）
東京藝術大学卒業。幼少の頃よりピアノやヴァイオリン、チェロを習い、15 歳から江口朝彦氏にコントラバスを師事。東京藝術大学器楽科入学後、本格的にクラシック奏者を目指しルートヴィッヒ･シュトライヒャー氏にも師事。大学卒業後、ポピュラー音楽の演奏活動も開始。中西俊博、フェビアン･レザ･バネらと共に「アルゼンチン･コンチネンタルタンゴ」の CD をリリースする等、タンゴブームの火付け役となる。その一方、古澤巌、葉加瀬太郎らと伝説のジプシーバンド「ヴィンヤード・シアター」を結成しライブ活動を行う。長きにわたりスタジオミュージシャンとして著名アーティストのレコーディングやアレンジ等を行ってきたが、2008 年リリースのアルバム「ブラックバス」をきっかけにソロ活動も展開。ポピュラー、ジャズ、クラシック等オールジャンルに対応できるマルチプレイヤーとして高く評価されている。

斎藤美枝／斎藤順・妻（ヴィオラ）
東京音楽大学卒業。ヴィオラを兎東俊之氏、中塚良昭氏に師事。ヴィオラ奏者として著名アーティストのコンサートサポート、レコーディング等に多数参加。また、譜面制作にも興味を持ち、ＩＣＳ国際コンピュータースクールに入学。フィナーレソフトによる楽譜の浄書を学ぶ。卒業後は夫である斎藤順の譜面制作をきっかけにＲＭＡＪ・ＪＣＡＡ・ＪＳＰＡ・弁護士会・宗次郎コンサート・レコーディング等プロの演奏家用の譜面制作も行っている。スタジオミュージシャンとして活躍する傍ら、ヴァイオリン、ヴィオラ指導者として数多くの演奏家を輩出。また、はがみえ名義で CD「低音二胡のメリーゴーランド」（2022 年）をリリース、二胡奏者としても活動中。

斎藤潔／四男（オーボエ）
1988 年洗足学園大学卒業。12 歳よりオーボエを始める。1990 年宝塚ベガ音楽コンクール室内楽部門第 2 位。2005 年よりシアターオーケストラトーキョーの首席奏者となり 2020 年まで務める。現在ロイヤルチェンバーオーケストラ首席奏者。オーボエを故梅原美男、故坂逸郎、山本安洋、虎谷迎悦の各氏に師事。

中村めぐみ／斎藤潔・妻（クラリネット）
東京藝術大学器楽科卒業。10 歳よりクラリネットを始める。第８回ヤマハ新人演奏会、同大学同声会新人演奏会に出演。卒業と同時にシエナ・ウインド・オーケストラ入団（創立メンバー）。東京クラリネットアンサンブル、東京クラリネットフィルハーモニー、Stwings のメンバーとして CD レコーディング、ライブに参加。他にシンフォニーオーケストラ、室内楽、ソリスト、スタジオワーク、ミュージカルオーケストラ等で活動を続ける。シエナ・ウインド・オーケストラでは多くの公演、CD セッション等でコンサートマスターを務める。クラリネットを稲垣征夫、故千葉国夫、故三島勝輔の各氏に、室内楽を山本正治氏に師事。洗足学園音楽大学、桜美林大学、尚美ミュージックカレッジ専門学校、非常勤講師。

斎藤みゆき／斎藤潔・長女（ホルン）
東京藝術大学器楽科卒業。12 歳からトランペットを始め、佐藤友紀氏に師事。17 歳よりホルンを始める。ホルンを日高剛、五十畑勉、石山直城の各氏に師事。室内楽を日高剛、佐藤由起、吉井瑞穂の各氏に師事。

斎藤ちあき／斎藤潔・次女（クラリネット）
東京藝術大学音楽学部卒業。11 歳よりクラリネットを始める。第 40 回霧島音楽祭 2019 に賛助出演。Michael Collins 氏のマスタークラスを受講。第 40 回ヤマハ新人演奏会クラリネット部門に出演。調布国際音楽祭 2022 に参加。クラリネットを中村めぐみ、三界秀実、伊藤圭の各氏に、室内楽を日高剛、岡本正之の各氏に師事。

内藤景子／斎藤家長女（ヴァイオリン）
東京音楽大学器楽科卒業。ヴァイオリンを故松本善三氏、安冨洋氏に師事。卒業後は、「レ・ミゼラブル」「屋根の上のヴァイオリン弾き」他、ミュージカルオーケストラ等に参加。現在は演奏活動の他、ヴァイオリン・ピアノ教室運営や山野楽器音楽教室等で後進の指導・育成を行っている。

内藤貴司／内藤景子・夫（ホルン）
国立音楽大学卒業後、主にミュージカルを中心に活動。ホルンを松崎裕、千葉馨、大阪泰久各氏に師事。26 歳から５年間東宝オーケストラに在席。その後多くのミュージカルや宝塚歌劇団等で演奏。現在もスタジオ録音や、K1 ウインドオーケストラ、数々のミュージカル公演等で演奏活動を行っている。

斎藤葉／斎藤鶴吉（弟）長女・姪（ハープ）
ハーピスト・作曲家。元 NHK 交響楽団チェリスト斎藤鶴吉の長女で横浜生まれ、姪。“温故斬新”がモットー、オープンマインドの精神でハープ音楽を拓く。東京藝術大学、同大学院、ローザンヌ音楽院卒。第３回日本ハープコンクール第２位。正統的クラシック活動の一方、あらゆるジャンルの音楽現場で従兄弟の斎藤順と共に活躍。1997 年スタジオ録音の現場でハープを弾いていた時、作曲家としてスカウトされ、以後我流の作曲作品を発表、JASRAC 準会員。伯父の作風の影響を受けたと自負する「小さな星の歌」が 2021 年ロケットミュージック社より楽譜出版された。日本ハープ協会理事。

佐竹明咲美（司会）
香川県出身。東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業。2015 年テレビせとうち（アナウンス室）入局。報道、スポーツ、バラエティ、選挙特番など幅広く担当。2020 年フリーアナウンサーに転身。BS テレ東や tvk などテレビ番組出演のほか、オーケストラや室内楽、子ども向け公演まで多数のコンサート司会を行う。

『秋刀魚の味』　写真提供／松竹株式会社

小津安二郎監督　写真提供／松竹株式会社

斎藤高順メモリアルオーケストラ

フルート……窪田恵美、内田彩菜美
オーボエ……斎藤潔
クラリネット……中村めぐみ、斎藤ちあき
ファゴット……中澤美紀
サキソフォーン……榮村正吾
ホルン……内藤貴司、斎藤みゆき
トランペット……砂川隆丈
トロンボーン……長谷川貴大
ティンパニ……久保創
打楽器……東佳樹、本間達也
ハープ……斎藤葉
ピアノ……横山和也
アコーディオン……増井裕子

コンサートマスター……對馬哲男
第１ヴァイオリン……杉本伸陽、西野絢賀、
崔田春菜、大田春菜
第２ヴァイオリン……奈須田弦、内藤景子、
大嵩有紀、上薗綾奈
ヴィオラ……山田雄司、斎藤美枝、
松本麗
チェロ……斎藤章一、鈴木和生
コントラバス……斎藤順

小津映画×斎藤高順メモリアルコンサート

主催　小津映画×斎藤高順メモリアルコンサート実行委員会
共催　公益財団法人江東区文化コミュニティ財団 ティアラこうとう
協賛　合同通信社　ロケットミュージック株式会社　株式会社ネクサス音楽出版
協力　松竹株式会社　全国小津安二郎ネットワーク　小津安二郎学会
　　アイケイ・オフィス　東京マンドリン・アンサンブル　株式会社フレンド企画

プログラム編集協力：斎藤民夫　株式会社 KEDIA Music Create　山本教司　原えつお　バトルロイヤル風間

楽しい音楽をしよう
ロケットミュージック

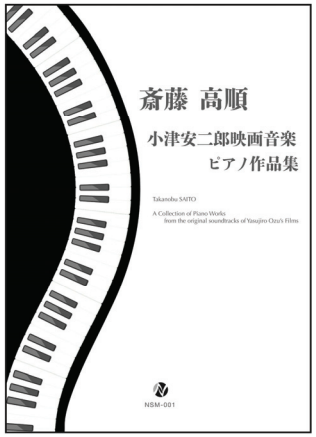
CD 情報

究極の吹奏楽～小編成アルフレッド・リード作品集

指揮：佐藤正人
演奏：ジャパン・ウィンド・プレイヤーズ
税込価格：3,300 円　商品番号：ORGS-1002

毎年好評の人気 CD＆楽譜シリーズ！！
究極の吹奏楽～小編成コンクール vol.8
指揮：佐藤正人、後藤文夫
演奏：尚美ウインド・フィルハーモニー（尚美学園大学吹奏楽団）
10 人程度でも演奏できる楽曲も収録した小編成バンドのためのレパートリー

■東京都世田谷区桜新町 1-19-10 ■tel: 03-6413-6699■fax: 03-6413-6663 ■www.gakufu.co.jp



斎藤 高順
小津安二郎映画音楽
ピアノ作品集

NSM-001 1,760円（税込）

収録曲

昭和28年 松竹作品
東京物語（主題曲と夜想曲）
昭和31年 松竹作品
早春（主題曲）
昭和32年 松竹作品
東京暮色（主題曲）**サセ・レシア**
昭和33年 松竹作品
彼岸花（主題曲）
昭和34年 大映作品
浮草（主題曲とボルカ）
昭和35年 松竹作品
秋日和（主題曲とボルカ）
昭和35年 松竹作品
秋日和より **オルゴール**
昭和37年 松竹作品
秋刀魚の味（主題曲とボルカ）

ネクサス音楽出版
〒431-1305 静岡県浜松市北区細江町気賀2919-72
TEL：053-545-5011／FAX：053-545-5012
E-MAIL：info@nexuss.net

2024年は斎藤高順生誕100年の節目。
ネクサス音楽出版では、吹奏楽作品を中心に
数多くの斎藤作品を取り揃えております。

小津さんの思い出（斎藤高順回顧録）

小津安二郎監督との出会い

１９５３年（昭和２８年）の春でした。ＮＨＫの音楽番組の編曲・指揮をしたある日、歌曲を唄ってくれた声楽家の今村桜子さんが、松竹映画の音楽指揮者と懇意にしておられるとのことで引き合わせてくれました。何とその方は、数年前に松竹大船撮影所でお目にかかった吉澤博先生だったのです。吉澤さんは、大船撮影所で音楽部門を仕切っていて、指揮者も務めていました。

吉澤さんは私の劇伴の音楽をすでに聴いており、気に入っておられたようでした。当時の私はラジオドラマの音楽を書いており、吉澤さんに『斎藤さんの音楽は映画に合う』と言っていただいたのが、「小津映画に合う」となったのではないでしょうか。

ちょうどその頃、幸運にも小津安二郎監督が新しい映画の撮影に入るところで、その音楽担当者を探しており、それを吉澤さんが任されていたのです。そして、吉澤さんはその仕事に私を推薦してくださいました。

小津安二郎監督といえば、当時の映画関係者の間では神様のような存在で、しかも大変厳しい方だという評判は私の耳にも入っておりましたので、夢のように思う反面、恐ろしさで身も縮むような複雑な気持ちでした。

そして、１９５３年（昭和２８年）の初夏、いよいよ小津監督との初対面の日がやってきました。吉澤さんに連れられて大船撮影所の門をくぐったときはたいそう緊張しました。何しろ、今まで映画の音楽など一度も作ったことのない新米の作曲家が、天下の大監督に会うのですから。

緊張のあまり口もきけずに頭を下げていると、小津監督は開口一番「今までにどんな映画音楽を作曲しましたか？」と言われました。私は「まだ一度もやったことがありません。先生のお仕事が初めてです。」と答えました。すると、一瞬驚いたような表情を見せましたが、すぐにニコニコ笑いながら「そいつはいいや。」とおっしゃいました。

ほっと胸をなでおろすと、いきなり助監督に映画の台本を持ってこさせ、その場ですぐに第一回目の打ち合わせに入ったのです。その台本は、芸術祭参加作品の『東京物語』でした。

御前演奏会

作曲家は、映画音楽の録音日の一週間から十日くらい前までにスコアを完成させておき、それを小津監督の前で一旦演奏披露するのです。これが御前演奏会と言われ、小津監督は作曲家に御前演奏をさせる特権を、松竹大船撮影所でただ一人持っていました。もしそこで監督が気に入らなければ、作曲家は録音当日までに書き直しを命じられるのです。

この際、小津監督は結構厳しいことを言うとの噂を聞いておりましたから、私は戦々恐々として『東京物語』の御前演奏会に備えました。

撮影が終わったのは昭和２８年の初秋でした。途中、何度か打ち合わせと称する飲み会がありました。そんなことの積み重ねがあって、いよいよ御前演奏会の日も迫ってきたある日、スタッフの一人から、「監督がもし気に入らなかったなら、本番までに全部曲を書き直さなくてはならなくなるかもしれないよ。」と脅かされました。

ついに『東京物語』の御前演奏会の当日となりました。スタッフ連中は、極度の緊張状態にあったことはいうまでもありません。トップタイトルの音楽が終わっても小津監督は一言もおっしゃいません。それから次々と吉澤さんの指揮で曲が演奏され、とうとうラストシーンの音楽も終わりました。

恐る恐る監督の方に顔を向けると、一言「今度の音楽はなかなか良いね。」と言われたのです。続けて監督は「いいね、音楽みんないいからね、この通りでやってください。」と褒めてくれましてＮＧはひとつもなし。スタッフの人たちがみんな喜んじゃいましてね、今までにないことだそうです。フィーリングが合ったのでしょうか。もう嬉しくて、録音の日まで家で酒を飲んで寝てました。

小津監督からの注文

『東京物語』のダビングの時点で、ひとつの問題が生じました。それは、東山千栄子さんが戦死した次男の嫁、原節子さんのアパートを訪れるシーンの音楽をめぐって起きたのです。

私はこのシーンを映画全体のひとつのヤマ場と感じましたから、特にシーンとピッタリ合う品格のあるものをと強く意識して音楽を付けました。ところが、小津監督は「この音楽はシーンと合い過ぎて、映画全体のバランスが崩れるから、ヴォリュームを絞ってほんの小さく入れることにしよう。」と言うのです。

私はその曲の出来ばえに自信がありましたから、とてもガッカリしました。けれども、そのあと小津監督はこう言ってくれたのです。「ぼくは、登場人物の感情や役者の表現を助けるための音楽を決して希望しないのです。」

また、こういう風にも言いました。「いくら、画面に悲しい気持ちの登場人物が現れていても、その時、空は青空で陽が燦々と照り輝いていることもあるでしょう。これと同じで、ぼくの映画のための音楽は、何が起ころうといつもお天気のいい音楽であって欲しいのです。」

小津監督の感情移入を避ける音楽の使い方について、初めて聞いたときは驚きました。でも、少したって考え直してみると、ムシャクシャして町を歩いているときに、楽しい音楽が聴こえてくることは私もよく経験することだし、小津監督の意見は何ら特別ではない、全くノーマルなものなんだと考えるようになりました。

そもそも、私はまだ小津監督のそういう考え方を知らない段階でも、特に嬉しがったり悲しがったりする音楽は書かなかったのです。だから、小津監督の考え方は、理屈で理解するには少し時間がかかったけれど、実は最初から私の作曲家としての体質に合っていたのかも知れません。

「サセレシア」と「ポルカ」

小津監督との第二作は『早春』でしたが、『東京物語』で書いたような叙情的な音楽は深刻なシーンには用いないで、逆に軽いリズミカルな曲を書くようにしました。

小津監督は「サ・セ・パリ」や「ヴァレンシア」が大変お好きだということを聞いていたので、両方の曲を調べたところ、まず８分の６拍子で要所要所に共通する音が使われていることを発見しました。そこで、とにかく拍子は８分の６とし、共通する音を楽譜に記載して、それを軸に自由に作曲したところ、「サ・セ・パリ」にも「ヴァレンシア」にも似たようであり、でも少し違うような面白い曲が完成しました。

それを『早春』の中では池部良さんが友人の見舞いに訪れる深刻なシーンと、友人の葬式のシーンのバックに二回使いました。この曲はＢＧＭとして書いたのに、遠くから聞こえてくるレコードかラジオの音楽のようで、いずれにしても場面を大変盛り上げる効果があり、監督はとても喜んでくれるし、スタッフ一同にもきわめて好評でした。

そこで監督に作曲の仕掛けを話したところ、「サセレシア」という素敵な曲名を付けて下さいました。よく考えてみると、「サ・セ・パリ」と「ヴァレンシア」を繋げただけの駄洒落のようなタイトルなのですが、小津監督はそのような茶目っ気も持ち合わせていたのです。

そして、三作目の『東京暮色』では全編音楽は「サセレシア」一つでやろうと小津監督に言われ、タイトルバックから深刻なシーンのバックに「サセレシア」を使いました。しかも、その後の映画も「サセレシア」で行こうと言われましたが、さすがに私の方が閉口して、小津監督が「ビヤ樽ポルカ」もお好きと聞いたので、ポルカ風の曲を作曲し使用させていただきました。

最後の作品になるとは思いませんでしたが、『秋刀魚の味』の時にも「サセレシア」を使いたいとおっしゃるので、「違う曲を書きます。気に入らなければ書き直しますから。」と言って書いたのが、あの映画で使ったポルカです。これも気に入ってくれて、「次回作もこれでいこう。」と言ってくれたのですが…。冗談だったかもしれませんが、「ぼくが詞を付けるから、宝塚の寿美花代あたりに歌わせてレコーディングしよう。」なんておっしゃっていました。

残念ながら、実現することはありませんでしたが。

小津監督との別れ

小津監督は１９６３年（昭和３８年）になって、築地の国立がんセンターに入院されました。そこへお見舞いに行ったのがお別れになってしまいました。

小津監督は、頸部にできた癌のため相当な痛みがあったはずなのに、私が訪ねるとベッドの上に起き上がって、「斎藤君、よく来たね。」と歓迎してくれ、次のようにおっしゃいました。

「斎藤君、ぼくの映画に作曲した楽譜は大事にとっておきなさいよ、きっとまた役に立つことがあるから。」と言われたのです。

小津監督は、本当に私の音楽を評価してくれていたんだ…ということを実感し、胸が熱くなったことを覚えています。あとは、何を話したのか思い出せません。

監督が亡くなられたのは６０歳、１９６３年（昭和３８年）１２月１２日の還暦の日でした。

小津監督とは、私が２８歳の時に出会い３８歳でお別れしました。たった十年間のお付き合いでしたが、生涯忘れることのできないとても大切な思い出になりました。

昭和２８年の初夏、大船撮影所で小津監督に初めてお会いした日のことは、今でも昨日のことのようにはっきりと覚えています。まるで夢のような十年間でした。小津監督、本当に有難うございました。

文責：斎藤園子（妻）、斎藤民夫（次男）
監修：斎藤鶴吉（弟）